

Newsletter

December 2018

<http://www.aack.or.jp>

目次

チョゴリザ 60 周年 「探検大学の誕生」60 周年記念事業 松沢哲郎1 チョゴリザ 60 周年特別展示と写真展 榊原雅晴3 極限下の隊員に配慮した素材、色彩へのこだわり 奥野温子5 衣類装備から見たヒマラヤと南極 横山宏太郎.....6 三高山岳部ルーム日記が AACK に戻った 斎藤清明、榊原雅晴.....8	ドロミテの Via Ferrata (鉄の道) 安仁屋政武.....11 ご案内 「AACK 人物抄」 平井一正20 会員動向20 原稿募集 十字峽横断.....20 編集後記20
---	--

チョコリザ 60 周年

—— 「探検大学の誕生」60 周年記念事業 ——

松沢哲郎

京都大学は「探検大学」と呼ばれる。そのひとつの契機となった 1958 年を顧みて、特別企画シンポジウム「探検大学の誕生」を、2018 年 6 月 17 日に京都大学(国際科学イノベーション棟 5 階)でおこなった。「京都大学の登山・探検・フィールドワーク～チョコリザ登頂 60 周年を記念して～」と題した。

前半は 4 人の講演者だ。平井一正「チョコリザ初登頂」、山極壽一「ゴリラ研究へ」、安成哲三「バタゴニアへ」、土井隆雄「有人宇宙活動へ」。これに続いて、「これからの探検大学」と題したパネルディスカッションをおこなった。坂本龍太、山本真也、松田一希の 3 名の 30-40 歳代の研究者である。コーディネーターは松沢哲郎がつとめた。

1958 年、桑原武夫隊長率いる遠征隊がチョコリザ (7654m) に初登頂した。京大がヒマラ

ヤに初登頂した最初の記録だ。その後、ノシャック、サルトロカンリ、ガネッシュ (アンナプルナ南峰) とヒマラヤ初登頂が続く。

1958 年は、今西錦司・伊谷純一郎によるアフリカ初探検の年でもある。今西らが名古屋鉄道に働きかけて創った日本モンキーセンターが派遣した隊だ。最初の目標はゴリラだったが、すぐにチンパンジーに切り替えた。

1958 年は、西堀栄三郎らによる南極初越冬の年でもある。第 1 次南極観測隊は観測船「宗谷」で東京を出港、南極に向かい、57 年 1 月、東オングル島に上陸し昭和基地を建設した。西堀が率いる 11 人の越冬隊員は基地に残り、翌 58 年 2 月に帰国の途につくまで厳しい越冬生活に耐えた。

今西らはヒマラヤ初登頂を目的として本会 (AACK) を 1931 年に結成した。ヒマラヤ初

——チョゴリザ 60 周年特別展示と写真展——

榊原雅晴

チョゴリザ登頂 60 周年を記念して今年 6 月 17 日、京大士山岳会主催の記念イベント「探検大学の誕生 京都大学の登山・探検・フィールドワーク」が京都大学で開かれた。メインとなるシンポジウムに加え、百周年時計台記念館で特別展示「花嫁の峰チョゴリザ、そして南極……」(6 月 5 日～7 月 1 日) と写真展「探検大学 早わかり」(6 月 1 日～7 月 16 日) が開かれた。この項では特別展示と写真展について報告する。

■苦労話で元隊員盛り上がる



特別展示の設営風景。平井一正隊員や松沢哲郎会長が陣頭指揮した

一昨年の「マナスル登頂 60 周年」記念イベントを終え、「次はチョゴリザ 60 周年」という方針が固まった。どんな中身にすべきか。中島道郎、平井一正、酒井敏明、高村奉樹、岩坪五郎の各氏らチョゴリザ隊員に集まっていただき放談会型式のミーティングを開いた。

「大学の場所を借りて開くのだから、年寄りが思い出にひたるようなものではない。登山や探検を出発点とした学問の系譜を若い人に見渡せるものを」「チョゴリザのころは高度障害のことは何も分かっておらず、心臓や腎臓の障害と考えていた。桑原隊長が『みんな顔が腫れている』と指摘したが、情けないことにドクターは気が付かなかった。その後、ヒマラヤで心電図をとるようになり、シシャパンマの医学

学術登山隊になり、マー坊(松林公蔵会員)のフィールド医学につながった」「ナイロンなどの化学繊維を装備に取り入れたフランスのアンナプルナ隊や AACK のチョゴリザ登山隊は『化学繊維隊』と言われた。当時、服装のことを一生懸命考えていたのは安田武さんくらいだが、安田さんの知見は現在からみてどうなのか検証してほしい。安田さんは『肌着は絹と純毛』と常々言っていた。ユニクロのヒートテックなど最近の新素材はどうなのか?」「チョゴリザから 10 年以上たったヤルンカンのテントは相変わらず一沢製だったが、JAC のエベレストはすでにダンロップだった。南極も含めた総括してほしい」「酸素ボンベや食料や無線や気象ファクスなど、当時と今はどうなっているのかを整理しておきたい。60 年前に今のような GPS があれば、C2 へのルート、アルブリッジルートへの誤認はなかっただろうか?」「テレビドラマ『コンバット』でサンダース軍曹が持っていたような重たいトランシーバーを持って行った。今の若い人が見たらびっくりするやろな」

さまざまな意見が飛び出したが、当時の隊員としては散々苦労した記憶からか、装備への話題で盛り上がった。

■チョゴリザから南極へ……

マナスル 60 周年の展示は文書や写真類が中心だった。今回の特別展示ではヒマラヤ登山黎明期の装備に焦点を当てるため、できるだけ現物を展示する方針を取った。幸いなことに当時の装備のいくつかが京都大学総合博物館に保管されており、チョゴリザで使われた平井隊員の羽毛服やアイゼン、登山靴、岩坪隊員のピッケルのほか、酸素ボンベやマスク、真空管式トランシーバーなどを借り受けた。このほか AACK で保管しているテントなどが時計台歴史展示室正面の展示ケースを飾った。展示品にはチョゴリザ登頂時の写真も添え、「川崎重工製の酸素ボンベは 2 リットル、170 気圧で 1 本 3 キロあり、これを 3 本担ぐと付属品を入れて

13 キロある。個人装備を入れると 20 キロ近くになる。できたら使いたくなかった」など当時の隊員の苦労をしのばせる解説パネルも付けた。

■安田武コーナーも



安田武さん (1927-1999)

チョゴリザ隊員によるミーティングで話題になったのが安田武さんの功績だった。被服気候学という分野を先導し、AACK だけでなく日本山岳会など多くのヒマラヤ登山を装備開発の面で支えた。その安田さんの功績をきちんと紹介すべきだという意見が強かった。

そこで安田さんの弟子に当たる奥野温子・武庫川女子大名誉教授に「極限下の隊員に配慮した素材、色彩へのこだわり」という解説文や、当時の防寒具の試作風景などの珍しい写真を寄せてもらった。



安田さんの指揮の下、被服学実習室で防寒具の試作をする学生たち。彼女らの奮闘がその後のヒマラヤ遠征を支えた＝1957 年ごろか？ 奥野温子さん提供



氷点下 50 度の極低温を再現できる人工気象室で繊維の強度変化を調べる学生たち＝1988 年ごろ、奥野温子さん提供

また安田研究室にも所属したことのある横山宏太郎会員（第 35 次南極越冬隊長）にも解説文「衣類装備から見たヒマラヤと南極」で、ヒマラヤ登山や南極観測の歴史を、被服の視点で紹介してもらった。



内陸旅行中に衣服内気候（温度）の測定を行う横山会員。重ね着した衣服のあいだに温度センサーを取り付け、ウェストバッグに納めた小型データロガーでデータを収録する。衣服表面にテープで貼り付けたセンサーが見える＝1994 年、第 35 次南極地域観測隊

展示場には武庫川女子大 OG も姿を見せ、「当時山岳部の人たちが研究室によく出入りしていた。繊維メーカーを訪ねるのにオンボロのクルマに乗せてもらったが、後ろのドアが閉まらないのに驚いた」などの思い出話も。60年前の女子大生にとってワイルドな山男たちとの遭遇は相当なカルチャーショックだったことだろう。

■探検大学早わかり

特別展とは別に時計台の京大サロンで写真展「探検大学 早わかり」を開いた。チョゴリザ初登頂の1958年は、西堀栄三郎による南極初越冬の年であり、今西錦司・伊谷純一郎によるアフリカ初探検、中尾佐助によるブータン、川喜田二郎による西北ネパール、梅棹忠夫による東南アジアの学術登山の年でもあった。このころから京大は「探検大学」と呼ばれるようになったという。

こうした登山・探検の精神が、京大を特徴付けるフィールドワークのもととなったという視点からの写真展である。

スウェーデンの世界的探検家ヘディンが1908年に京大を訪れたことから説き起こし、京都帝大・三高山岳部の黒部合宿、白頭山や大興安嶺などの探検隊、チョゴリザ登山や南極探検、京大とブータンとの交流、チンパンジーやゴリラを求めたアフリカの模様など、30枚近



自らの登頂写真の前に立つ平井一正会員

い写真パネルを展示した。

AACK 名誉会員の山極寿一総長は「ワイルド&ワイズ」の教育理念を掲げている。ヘディンも今西錦司も梅棹忠夫も知らない今時の学生にとって大きな教育効果があったのではなからうか。

(榊原雅晴)

—— 極限下の隊員に配慮した素材、色彩へのこだわり ——

武庫川女子大学名誉教授 奥野温子

安田武先生の随筆「合成繊維の生まれるまで」の冒頭に“子供が野原で遊んで居る時、その誰かは少しでも高い丘を駆け登って遠くを見渡し、どんなになっているのかを早く知ろうとするものです。”と書かれています。“その誰か”はまさに安田先生ご自身であったかのように思います。誰よりも早く丘に登り多くの情報や知識を得られ精神的にリーダーシップをとって第一線を走り続けてこられた安田先生は、山を愛しご自身の専門分野である繊維化学とも関連されて、チョゴリザ、マナスル、エベレスト、南極など高所登山衣服や装備に先駆的な研究開発を手掛けられ、多くの論文や随筆と共に京都

大学学士山岳会や日本山岳会の登山装備に貢献をしてこられました。装備の研究開発には、安全性を第一に厳しく妥協を許さず徹底したデータと実績をもとに、豊富な知識と優れた発想で先々を見通したアイデアは普通の人には真似のできないものであったと思います。また、冷酷な自然環境の中で極限状態に置かれる隊員の方々の心情に配慮された素材と色彩へのこだわりはユニークなものでした。

世界的に知られた冒険家、植村直己氏からも安田先生の設計されたウィンドヤッケは、ここぞというときに一番信頼の出来る装備と伝えられています。植村氏はマッキンリー登頂の帰路

に消息を絶ってしまわれましたが、その原因について、“最新のハイテク素材の重ね着に問題があった”と指摘され、肌着や重ね着の手法について、被服気候の見地から保温性や水分移動の機構を明らかにして、高所登山での安全で快適な重ね着の仕方を示す「レイヤードシステム」を開発、提唱されています。

巧みな話術、豊富な知識、ユニークな講義、アイデアに満ちた綿密な実験指導等は、多くの学生達の将来に影響を与えてられました。本務の研究では、繊維の微細構造の検証、低温プラズマによる繊維加工、身近な高分子のゼラチンや寒天、カニの甲殻、クモや蓑虫の糸、イ草、イカとスルメ、等々……その業績は多岐に渡りとどまるところがなかったように思います。さ

らに、校務においても学科の振興に多大の功績を残されています。

今は、卯辰山（金沢市）の頂に正五位勲三等叙勲と刻まれた墓石の下に安んじられておられます。何故か墓石の周りには小さなスマレが咲くとか。生前に私達を卯辰山に誘われ、“ここからは見晴らしの良い日にはアルプスの高峰である立山と剣岳が眺められ、厳しい冬の積雪でも遠い立山は真白く、岩だけの剣岳は黒々と永遠に私を楽しませてくれる所です”と遠く山の彼方に思いを馳せられていた清い眼差しは、今も武庫川女子大山岳スキー部のOGや私達門下生の心に生き続けておられます。

（チョゴリザ60周年特別展示に掲示された解説より）

——衣類装備から見たヒマラヤと南極——

第35次南極越冬隊長、横山宏太郎

【開発の時代】

日本の南極観測は、1956年の第1次隊出発から始まった。南極は極寒の環境であり、行動の安全と作業の効率化のためには、衣類装備の性能、特に防寒性、防風性が重要になる。南極観測の開始にあたり、防寒衣類装備の研究開発が進められることになった。

基本はおなじ寒冷環境の活動である登山の衣類装備にならうことになった。それに加え、1950年、アンナプルナ峰（8091m）初登頂のフランス隊など、最先端であるヒマラヤ登山の装備も参考に、試作やテストが行われた。当時は日本でも合成繊維の生産が軌道に乗り始めた時期でもあり、様々な合成繊維をそれぞれの特徴を活かして利用しながら、次第に装備は改良され定着していった。

ところでヒマラヤと南極では、環境は似ているが行動様式が違い、装備類にも違いが出る。南極では輸送・移動に雪上車などの機械力を使うことが多いので、重量や嵩をそれほど気にせず、保温性の充分な装備を用いることができる。全てに軽量・コンパクトさが求められるヒマラヤとの違いである。

【確立の時代】

横山が参加した第14次南極地域観測隊（1972～74）は、このような開発の歴史を経て、衣類装備についてはほぼ体制が確立した時期といっていよう。21年後に参加した第35次隊（1993～95）でも、基本的な装備はほとんど同じであった。

昭和基地付近の場合、年平均気温は -10°C 程度、最低気温は -45°C 程度である。下着はウール製と合成繊維製を用意し、中着にカッターシャツやキルト肌着など、外衣にはかぶり式（前開きのない）のウインドヤッケが標準で、土木作業もある夏季はビニロン製、冬季はナイロン製の2種類があった。特に寒いときは羽毛服を用いる。靴は、綿入りの防寒安全ゴム長靴を用いる。

内陸旅行の場合は、昭和基地よりさらに低温の環境になる。年平均気温は -50°C を下回ることもある。上半身は、内側からウール下着、ウールカッターシャツ、キルト肌着（合繊綿入り）、ナイロンヤッケに極寒用として羽毛服といった組み合わせが標準だった。

日本隊独自の装備として特筆すべきはD型極地用防寒靴、通称D靴である。中敷きや靴

下で保温性を調節し、内陸旅行全般で用いられてきた。内陸では雪上車での移動が基本で、長時間歩くことはほとんどない。そのため、歩きやすさよりも保温性を重視している。その後多少の改良を加え基本はかわらぬまま、現在でも、また世界各国でも利用されている。

手袋はウールの5本指手袋（普通と厚手）、それらに重ねる黒皮五本指手袋、極寒用としてボア付きのオーバー手袋などがある。しかし細かい作業への対応は難しい。手指と顔面の保護には課題が残っている。

【改良にむけて】

1980年代、武庫川女子大学家政学部被服学科において、国立極地研究所の協力を得て、南極装備の着用試験を行った。人工気象室において気温 -40°C ・微風で、軽作業という条件で、衣類の組み合わせを変えて試験を行った。衣服内の温度・湿度の測定とともに、暖かい・寒い、快適・不快に感じているかを記録した。上記の内陸旅行の標準的な組み合わせ（羽毛服なし）が、安静時でもそれほど寒く感じず、運動をするとやや暖かくなり、最も適切と思われた。経験的にとられてきた着装方法はほぼ妥当といえる結果であった。

第35次隊では、従来とはちがう、試験用の衣類を配布して着用の様子を調査した。また、小型データロガーを用いて、内陸旅行中に、衣服内気候測定を行った。さらに、昭和基地や内陸旅行中にどのような衣類を着ているか、また寒さや暖かさをどのように感じているか、実態調査も行った。結果として、胴体など身体的主要部は中立より暖かめの回答が多く、ほぼ満足できるが、手と顔面は中立より寒い方の回答が多く、保護保温が難しいことがわかった。多くの人が感じていたことをデータとして示したことになる。

このように、衣類装備は基本的な性能を満たしていたため、長い間、大幅な変更なく使われてきた。しかしその間に、新しい素材が開発され、また市販のアウトドア衣料も充実してきた。そこで2008年の第50次隊から、衣類装備の見直しが行われた。野外行動用の衣類装備も、いくつかのメーカーを選び、最先端のものを導入し、それを何年かかけて、より南極に適するように改良していくことになった。伝統の

D靴も、52次隊からは足首が締まって歩きやすいものになった。現在も、改良の努力が続けられている。

（チョゴリザ60周年特別展示に掲示された解説より）



写真展「探検大学早わかり」の冒頭部分、アインシュタインと西堀の写真など



写真展「探検大学早わかり」、ヒマラヤ、南極、ブータンなどの写真



チョゴリザ60周年特別展示、チョゴリザ関連のポスターや出版物など



チョゴリザの装備類の展示



展示に見入る人たち



南極の装備類の展示。左はD型極地用防寒靴。

三高山岳部ルーム日記が AACK に戻った

斎藤清明、榊原雅晴

○三高山岳部資料引き渡し

ルーム日記を含む三高山岳部関係資料が10月15日、旧財団法人三高自昭会・三高記念室の井垣隆敏事務局長から松林公蔵・前 AACK 会長に引き渡された。

今年100歳を迎えた井垣さんは「同窓会も

なくなり、このままでは三高の記憶も消滅してしまう。きちんと記録を残してくれる部署は少なく、山岳会に資料をお持ちいただけるのはありがたい」と述べた。目録と受領書を交換した松林前会長は「責任を持って管理いたします」と約束した。



写真1 目録と受領書を交換する松林・前 AACK 会長と、井垣・旧三高自昭会事務局長

資料引き渡しに際し、三高記念室関係者から三高会館（寺町四条北東角、菊水ビル6階）の利用などについて協力要請があった。「交通利便の談話室だが、近年利用者が激減しているという。いす16脚、長机4台をそろえ、料金も手頃なのでぜひ使ってほしい」としている。問い合わせは三高会館の会世話人会（075・241・3757、sankoukaikan@gmail.com）。山岳部を含む三高OBが専門分野を語った講演録「神陵文庫・紅萌抄」等の書籍42巻約7000冊の在庫があり、こうした書籍を高校生などの若い人たちに読んでもらえるよう、AACK会員の皆さんにもお力添えいただきたい、との要請があった。詳しくは紀書房（www.tadas.com）の高林伸樹社長へ。

○資料の由来

第三高等学校は戦後の学制改革によって1950年3月末に廃止され、三高山岳部も自然消滅となった。1923年に今西錦司や高橋健治、西堀栄三郎、桑原武夫、四手井綱彦ら三高の二年生が中心になって山岳部を結成して以来、四半世紀余にわたる歴史（小島栄らが1913年に設立した三高山岳会からだと約40年間）を閉じた。

とはいえ、三高山岳部員の多くは、京都帝大旅行部でも活動し、AACKに加わっており、その伝統や遺産はさまざまなかたちでAACKに伝わっている。

なかでも、三高山岳部所蔵の文献資料類は、AACKにきちんと引き継がれ、国際登山探検

文献センターに保管されてきた。これは、京都帝大旅行部の蔵書類が1947年に西部構内の食堂からの類焼で部室もろとも焼失した痛恨事を教訓にしたものでもあった。

この文献センターは1973年に京大本部構内の正門を入れて左手の赤レンガ建物の一角に設けられ（AACK事務室も）、建物は京大から借用し、設立費用は日本万国博覧会記念協会の補助金に拠ったものであった。その設立の経緯は梅棹忠夫「国際登山探検文献センター」（梅棹忠夫著作集第1巻）に詳しい。

三高山岳部資料類は、三高の解散後、OBの吉井良三京大教授（当時、1999年没）宅に保管されていた。これを、文献センター設立に伴って（むしろ、文献センター設立を急いだひとつの理由でもあったと梅棹は記している）、旧三高山岳部員の承認を得て全資料が文献センターに移された。ここに、安定した保管場所を得たのであった。

ところが、2000年になって、本部構内（吉田キャンパス）の整備に伴って、AACKが借用していた建物からの退去を求められた。文献センターも廃止せざるを得なくなり、同年5月25日にAACKが建物から撤収した際に、文献センター図書・資料類などAACKの所蔵品は三つのグループに仕分けされた。①図書、②図書でない資料（文書、スライド、アルバム、16ミリフィルム、三高山岳部資料など）、③登山装備の類。

このうち、大部分を占める①図書は、京都大学に寄贈して附属図書館に収められた。京都大学図書として登録し、中央図書館地下に配架されている。図書でない資料類などは、京大総合



写真2 三高山岳部の貴重な資料を見る井垣・元三高自昭会事務局長

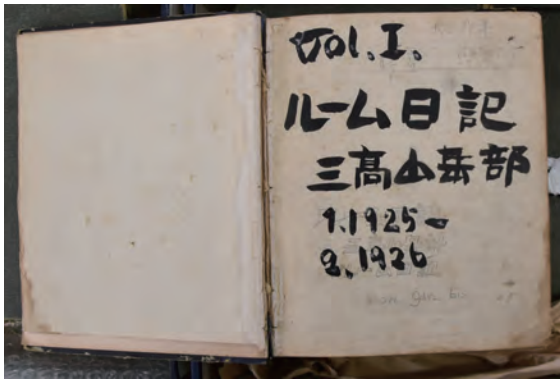


写真3 AACKに帰ってきた三高山岳部ルーム日記の第1号



写真4 三高山岳部のルーム日記には、部員の山行日数が一覧表になっている

博物館に預かってもらったが、やがて引き取りを求められ、現在、多くのものはAACK事務局に仮保管されている。

この間に、三高山岳部資料は、財団法人三高自昭会・三高記念室に移された（2004年7月18日）。これは、三高記念館が京大に設置されるということで三高関係の資料収集が進められ、三高山岳部OBでもある廣瀬幸治（2010年没）らが協力したものであった。

三高記念室では山岳部資料を整理し、全体をAアルバム、Bルーム日記、C『三高山岳部報告』、D『三高山岳部報告附録』、E『三高山岳部時報』、F学習記録、Gその他の活動記録、H事務記録、I名簿・目録、J諸山岳部連合団体関係、K京都府立第一中学校山岳部関係、L大興安嶺探検関係、の12のカテゴリーに分別。年月日順に並べ、整理番号を付して、保管箱に収められた。この作業は記念室の田中智子（現・教育学研究科准教授）の手に拠るものである。

しかしながら三高記念館計画が頓挫し、集められた三高関係資料類は大学文書館に移されることになった。その際に、三高自昭会・記念室の井垣隆敏事務局長は山岳部資料を除かれ、手元に保管された。文書館に入ると閲覧などできず、文字通りお蔵入りになると判断されたのだ。

そして、三高山岳部資料は井垣氏のもとで保管されてきたが、AACKでは今年3月の理事会で引き取ることを決め、今回の引き渡し式となった。

こうして、AACKのもとに戻ったのではあるが、今後の保管について考えていかねばなら

ない。中長期的にみると、AACKでは維持していくことは困難ではないだろうか。資料類の公開も含めて、委ねられる公的機関を積極的に探すなど、しっかりと方針を立てる必要があるだろう。

○ルーム日記

この三高山岳部資料のなかで最重要なのはルーム日記といえよう。なにしろ、印刷物ではなく、現物しか存在しない手記なのだから。当時の三高山岳部の部員が手書きしたものである。

三高山岳部ルーム日記は、1925年から戦後の1949年までのノート34冊分と三高解散後の1953年の1冊（吉井良三印あり）がきちんと残されている。うち、1939年分までは単年または二年分がハードカバーのノート製本11冊になっている（表紙が外れたものもあるが）。これらは、他の資料類と同様に、古文書類を収納する帙箱に分けて収められ、AACK事務局に仮保管された。

そのルーム日記の最初の頃の一部を紹介しておきたい。

『三高山岳部ルーム日記』の第一冊目は、1925（大正14）年1月から翌年2月まで。今西錦司らが三高を卒業し京都帝大に進学した年にあたる。三高山岳部は1923（大正12）年4月に発足しているのだが、当初はルーム日記はなかったようだ。

霊仙スキー登山（1月24日－25日、飯島猛夫他四名）の山行記録に始まり、部員の行った山行の報告が当人の筆で綴られているのはもちろん、「ルームの気分」「卒業にあたって」（い



写真 5 三高山岳部資料の引き渡しを終えた AACK、旧三高自昭会の関係者

ずれも筆者の署名は ETE、つまり西堀栄三郎など各人の感想文も書かれている。「榎（有恒）氏歓迎 Tea party」「山岳部登山についての内規」「横山岳遭難新聞記事切抜き」などもある。

日記は A4 判大のノート 330 頁にわたってほぼびっしりと書かれている。日記の最後に部員の登山表一覧も記載されており、「大正十三年 部員ノ山ニ費シタ日数」は次の通り。「1 位 今西錦司 八二日」、以下は「四手井綱彦 八〇日」「西堀栄三郎 七七日」「高橋健治 六〇日」「多田政忠 五二日」「渡辺漸 四一日」「桑原武夫 三四日」「佐島敬愛 三四日」「田中嘉穂 三三日」など、19 位の井上金三（一五日）まで。このように、三高最後の学年の今西は、いかに登山に打ち込んでいたかがよくわかる記録である。

今西は京都帝大生になっていたが第一冊目に、北山の「水源ワンダリング」について書いている。今西や西堀、高橋ら三高山岳部創立メンバーは 1925 年 4 月、三高の北隣にある京都帝大にそろって入学するが、このとき京都帝大

には山岳部はなかった。旅行部はあったが、三高山岳部のようなアルピニズムをめざすクラブではなかったので、今西たちは三高山岳部のルームに出入りし、仲間や三高の後輩たちと熱心に登山を続けた。

「水源ワンダリング」は、1925 年 5 月 31 日、高橋との山行の記録である。ともに農学部の一回生で、「三高山岳部の三羽がらす」（もう一人は西堀）とはやされた精鋭が、やぶこぎ（ジャンジャンと称した）しながら北山の中心部を探索している。詳しいルート図が添えられていて、行動がよくわかる。この付近は、今日では北山歩きの人気のあるコースになっているが、当時は地図も正確ではなく、地名さえもはっきりしていなかった。ドーラン（胴乱）を肩に、植物採集をしながらの山行で、ルート図には針葉樹や広葉樹の記号も書き入れている。生物学を専攻し始めたばかりの学生らしいが、しっかりした記述であり、のちに探検を志す片鱗がはつきりとうかがえる。

今西は半年後、「水源ワンダリング 第二報告」を書いている。11 月 1 日の単独行の記録。加茂川の水源地帯で、三高山岳部としてまだ確認できていない白倉峠をめざした。この峠は、桑原はじめ何人もが捜したが見つかっていなかった。今西は二ノ瀬ユリの尾根道から源流域に下りて捜すが、今回も見つからなかった。発見するのは、その一年後の 1926 年 10 月 31 日のワンダリングのことになる。そして、北山の開拓時代にひと区切りをつける（その経緯は、『三高山岳部報告』第五号に「芹生峠付近」として記述する）。そして、今西は大学の最後の学年になった 1927 年 4 月 12 日まで（ルーム日記第 4 冊目の末尾）、三高山岳部ルーム日記に執筆したのである。

ドロミテの Via Ferrata（鉄の道）

安仁屋政武

皆さん、イタリア・ドロミテの Via Ferrata という岩登りもどきの山登りを知っているでしょうか。AACK の会員で、知っているあるいは経験したことがあるという人は多分多くはないと思うのでその一端を紹介します。

3 月に会員の遠藤さんからドロミテに行かな

いかと誘われた時、ヨーロッパの山登りに積極的な興味が無かった私はあまりピンと来なかった。ドロミテと聞くと、中学生の時に読んだヘルマン・プールの「八千メートルの上と下」に出てきたチベッタとかドライ・チンネン、マルモラーダなどの山名が浮かんだ。そうか、これ



写真1 パテルンコーフェル、ドライ・ツィンネンを北(ロカテリ小屋付近)から観る(2018.7.18撮影)。左から小ツィンネ、大ツィンネ(岩壁は約500m)、西ツィンネ。パテルンコーフェルの手前のピークに長く急なトンネルが掘られている。

らの山を見に行ってもいいか、ということで決め、2018年7月中旬ヴェニスから入り8月上旬ミュンヘンから発つ1ヶ月の計画で行った。

具体的な計画を考えるに当たり、Via Ferrata(イタリア語で鉄の道、以下VFと略す)というのがドロミテでポピュラーなのを遠藤さんがネットで見つけた。これは急な岩壁のルートに張ってあるワイヤーにカラビナをかけてセルフビレイしながら行く登山スタイルである。垂直に近いところにはハシゴが懸かっているその脇にワイヤーが張ってある。日本の鎖場と似ているようであるが、ネットでいろいろと読んでももう一つイメージが掴めなかった。用具としてハーネス、専用のスリングとカラビナ2枚、ヘルメットが必要と書いてある。私は荷物が増えるので、最初は乗り気ではなかったが、いろいろと読むうちにやってみてもいいか、と思うようになった。ガイドブックには普通のスリングでは落ちた時危険なので専用のY形状のものを使えと書いてあるが、日本では売っていない。取り敢えず、120cmのスリングを2本用意した。

専用の物は現地のスポーツ用具店で見せて買った。スリングは蛇腹式で伸び縮みし、カラビナも大きく特殊なもので、使い勝手は良さそうだが、70~90ユーロと結構高い。結局、落ちなければ普通のスリングでも構わないだろうということで買わなかった。ワイヤーを掴むのに指先のない手袋が良いとあったが、これも30~40ユーロと結構な値なのでパス。軍手を試してみたが滑るのでグリップが効かない。結

局、私は素手で通した。行った所のワイヤーはほとんどが真新しく、手入れは驚くほど行き届いていた。錆び錆びでは素手では厳しいだろう。

コルティナー・ダンペッツォからのVia Ferrata

7月17日にコルティナー・ダンペッツォに入る。ここは西のボルツァーノと並ぶ(東)ドロミテの中心地で、1956年に冬のオリンピックが開かれた。猪谷千春がアルペンスキーの回転で銀メダルを取り、日本中が沸いた。また、オーストリアのトニー・ザイラーがアルペンスキー3種目制覇したことで、高年のスキーや山をやる人間によく知られている。従って、おじさん、おばさんには人気のある町で、10~15人ぐらいの団体や個人(夫婦が多かった)を幾人か見かけた。北部ドロミテは南チロルと呼ばれ、第一次世界大戦まではオーストリー・ハンガリー帝国の領土であった為、地名は基本的にドイツ語でその後イタリア語が充てられた。このような歴史から地図の地名はイタリア語でドイツ語併記となっているが、地域によってはドイツ語でイタリア語併記のところもある。

最初のVFは、ドライ・ツィンネン(Drei Zinnen、2999m: イタリア名はトレ・チーメ・ディ・ラヴァレド Tre Cime di Lavaredo)であるが、我々にはドイツ名の方が馴染みがある——因みに剣のチンネはこれの単数)の脇にあるパテルンコーフェル(Paternkofel、2744m)であった。コルティナーからバスで、南麓のアウロンゾ小屋(Rif Auronzo、2320m)まで行く。ここには広大な駐車場があり、大勢

の観光客、ハイカーがいた。さすがドロミテで1, 2を争う人気の山である。道も良く小屋もあるので運動靴でも安心して歩ける。この地域は第一次世界大戦の時、オーストリー・ハンガリー帝国とイタリアが激しく対峙したところで、未だに前線の痕跡がある。VFはこの時、兵士が山を歩けるように岩を穿って歩道をつけ、急な所にはワイヤーや梯子を設置したのが始まりとのことである。それに加え、パテルンコーフェルには急で長いトンネルも掘られている。コルティーナでもらった地図の一つに、両軍の前線の位置を示しているのがあった。

クライネ・ツィンネ東壁を登攀している2人を見ながら大勢の人がいるパテルン乗越(Paternsattel, 写真1)へ行く。ここでロカテリ小屋(Rif Locateli, 2405m)へ行く一般道から別れてパテルンコーフェルへの道を行くと、最初のトンネルの前で皆VFの準備をしている。地図によると点線道(VFではない)なのに、エッ!?!という感じであった。トンネルを抜けるとロープ、ワイヤーが出てきた。が、日本の山では鎖を張るような場所ではない。しかし、この先状況が分からないので、我々も念のためハーネスを着けて準備した。図らずもVFの最初の経験となった。ワイヤーに2本のシュリングのカラビナ2つを通してピンのところで一つを外して次のワイヤーにかけ、それから2つ目を外してかけるという動作の繰り返しは慣れないのでまどろっこしかった。高度感のあるトラヴァースや急な岩壁を登るようになると、これは安心感を与えてくれた。ワイヤーはピンと張られているので、安心してぶら下がる。カラビナを掛けていればスリップしても下までは落ちない。日本の鎖のように振られることもない。しかもワイヤー、ボルトは真新しい。目の前の岩壁を見上げるとコル(Gamsscharte, 2640m)から東に分かれている別のVFの岩峰のギャップを跨ぐ橋が見えた。初めてなので「あんな所行くのかよ!!」という印象だった。

コルから頂上までは50~60度の壁にワイヤーが張られているので行けるとのことで、結構な人数が張り付いていた。我々は日帰りでのバスの時間の関係もあり、パス。しかし、何十年振りかはこのような岩壁に来た私は、正直慣れてなく時間があっても行ったかどうか疑わしい。コルからの下りは結構急な所もあり、最初

のVFとしてやや緊張する箇所もあった(写真1参照)。間もなく長い階段になっているトンネルの入口に到達する。2年前、腰を痛めてからバランスが悪くなっているのに、ワイヤーの無い岩場、急な下りには特に気を使って慎重に降りた。

ロカテリ小屋周辺の人だかりはすごかった。日本の北アルプスの夏の人気の小屋の様相である。せっかくだからということで、テラスでコーヒーを飲む。ドライ・ツィンネンの北壁は何度見ても飽きない圧倒的なスケールである。天気も良く、ここからは広い道をてくてくと写真を撮りながら歩き、アウロンゾ小屋駐車場へ戻った。

ドロミテの地図はタバコ(Tabacco)あるいはコンパス(Kompass)の2.5万が一番信頼されていて、トレイルは難易度によって細かく3段階(破線、点線、十字鎖線—VF)に記載されている。しかし、同じ点線道でも普通に歩ける道からほぼVFのものまで、かなりの幅があることが分かった。要注意である。山の標高が両図で若干違うことがあるのにも注意。今回使ってみて一番驚いたのは氷河の記載である。ほとんどが現実と全く違うので、山を同定するのに最初はとても困惑した。氷河の最近の早い後退の結果であるが、数十年前の輪郭では全く役に立なかった。

次に行ったVFはコルティーナのすぐ西にあるトファーナ・デントロ(Tofana Dentro, 3238m)である。標高1200mの麓からゴンドラで中間駅を経て一気に3200mのチーマ・トファーナ小屋(Rif Cima Tofana)に行き、ここから少し登ってからコースに入る。鞍部が3088mの吊り尾根となっており往復することにした。小屋から広い道沿いに展望台の所へ行った。その先の下りはおすかな踏み跡しかなく、すぐに険しくなり足跡は消え崖の上に出た。まだVFというものがどのようなものであるかよく分からなかった我々は戸惑った。しかし、こんなところに行く筈が無いということでキョロキョロしたら下の方を歩いている登山者を見つけた。道を間違えたのだ。登り返して正しい道を行き、VFに入る。鞍部への下り道は岩層の傾斜に沿ってつけられていて幅広く、日本では鎖をつけないような歩きやすい所である



写真2 ブレンタ・ドロミテ西面のパノラマ (2018.7.22 撮影)。セロドリ山への道から観た。下はマドンナ・ディ・カンピリョの町。Via Ferrata はほとんど東側を通っている。Rif Tuckett の点線は小屋が岩の後ろにあることを示す。

が(点線道)、一応ほぼべたにワイヤーが張られている。安全を期してカラビナ1枚を交互にかけながら行く。小学生低学年ぐらいの子供連れの家族が何組かいて、驚いた。コル付近から険しくなり(槍—北穂のキレットのような感じ)ワイヤーを積極的に使い出す。ちょっと慣れてきた。

頂上からは、眼下にコルティーナの町が、正面にはどっしりとしたクリスタロ (Monte Cristallo, 3221m)、右側にはソラピス山群 (Gruppo del Sorapis) の3000m級の山々が見える素晴らしい景色である。ここから振り返るとチーマ・トファーナ小屋があるトファーナ・ディ・メゾ (Tofana di Mezzo, 3244m) の地質が凄い。地層が垂直に立っているところに水平の地層が接している。前日、ドライ・ツインネンで見たのと同じで、文献で読んでいる激しいアルプス造山運動の一端を垣間見た。頂上ではスロバキアから来たと言う若いカップルと言葉を交わす。自転車旅行の途中に寄ったとのことであった。帰りは慣れたこともあり余裕で、地元?の人がどのようにワイヤーを使っているかすれ違いで待っている時ちょっとみたが、積極的に使う人もいれば、ほとんど触らないで歩く人もいた。

チーマ・トファーナ小屋から20分ぐらいで行けるトファーナ・ディ・メゾの頂上は混んでいた。小屋に戻ると大勢がテラスで日光浴を

やっている。ビールとサンドイッチで遅い昼飯にする。旨い。意外?なことに、値段は下の町とほとんど変わらない。他の山小屋でも同様であった。

ブレンタ・ドロミテ

我々が最後に行った今回のVFの本命、ブレンタ・ドロミテのVia Ferrata Bocchetta alte(写真2)は、帰ってから見たインターネットのガイドのブログによっては最も知られているコースと書いてある4~5日の行程である。我々はその一部を行った。ここはドロミテでも日本人にはほとんど知られていない地域で、誰も見なかった。

7月23日:麓のマドンナ・ディ・カンピリョ (Madonna di Campiglio, 1500m) から少し離れたところにあるケーブルカーで標高2442mのグロステ峠 (Passo del Groste) まで一気に行く。10時頃歩き出す。ここは地層の傾き加減から平らで緩やかに傾斜している台地である。先行しているパーティが幾つか見える。道標に沿っていくが、グロステ峰 (Cima del Groste, 2857m) の登りで道を間違えた。ここは紛らわしいらしく、他にも間違えたのが何人かいた。しばらくは地層の面に沿った広くて傾斜の緩いトラヴァースの道を、ハーネスをつけないで行く。ワイヤーが出始めた所でハーネスを着



写真3 ヴァネシネラ鞍部への下り(2018.7.23撮影)。
矢印は登山者を示す。この下は数百メートル切れ落ちていて、圧倒的な高度感がある。

け、安全を確保しながら歩いた。結構急な登り、下りがある。地図ではこの道は点線でVFとは書いていない。途中のコルを挟んだ下り・登りはかなり急で岩登りの経験が無いとスリングで確保されていてもかなり怖いのではないかと思います。特にヴァレシネラ鞍部(Bocca Alta di Vallesinera, 2875m)への下りは急で長く、高度感も圧倒的にある梯子の連続である(写真3)。セラ峰(Cima Sella, 2946m)の手前で今晚の宿泊地トゥケット小屋(Rif Tuckett, 2272m)への道は2つに分かれる。一つは尾根沿いのもの、もう一つはピークをトラヴァースしてトゥケット鞍部(Bocca del Tuckett, 2647m)へ行き、そこから氷河(雪に覆われている)を下る。我々は荷物を軽くするためにアイゼン(軽)を携行していなく、雪・氷の状態が分からないので、尾根の道を下った。小屋には2時半頃到着。晴天でそよ風があり、最高に気持ちが良い。ビールで喉を潤す。

トゥケット小屋はバー・食堂・帳場がある昔からの建物と、新しい宿泊棟がある。我々は個室に入れた。毛の敷布と毛布がある。共同トイレは水洗で、シャワーもついている。小屋からの景色は「素晴らしい」の一言に尽きる(写真4)。

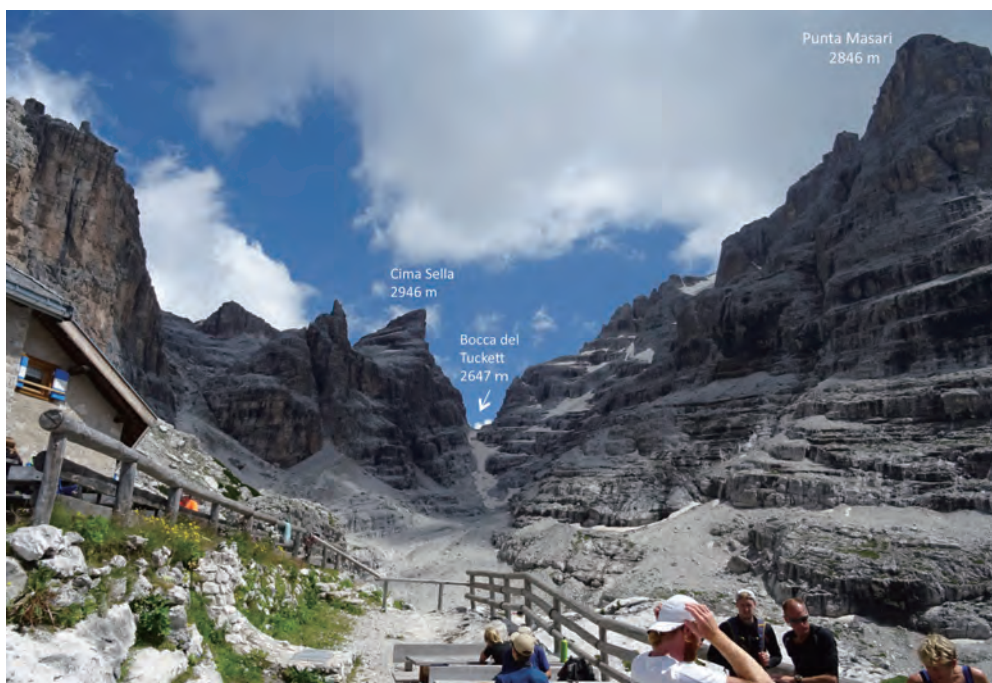


写真4 トウケット小屋からトゥケット鞍部を観る(2018.7.23撮影)。正面は雪に覆われた氷河。翌日、鞍部から右側の稜線を行った。



写真5 垂直に近いところにはこのような梯子が懸かっている(2018.7.24撮影)。ワイヤーが横に張ってあるので、これにカラビナを掛けておけば下まで落ちる心配はない。梯子はしっかりしていて全くぐらつかない。頂部には手摺りがある。これは20mぐらい。

客は、ガイド連れのパーティもいるようだが、家族連れ、カップルが多い。男だけ、あるいは女だけというグループはあまり見なかった。

7月24日：今日はこのコースの核心部に行くので、7時過ぎに早立ちする。トゥケット鞍部に行く雪田(氷河)は思ったほど硬くなく、アイゼンの跡があったが、ツボ足で問題なかった。私はせっかく持って来たので、ストックを使った。鞍部には約1時間で着いた。ここでハーネスを装着する。その間にぞくぞくと登ってくる。最初から急な登りで、鞍部が真下に見える。昨日と比べると登り下りが激しい。梯子も結構出てくる(写真5)。主峰のブレンタ峰(Cima Brenta, 3150m)はトラヴァース道からほぼ垂直に見上げる。まもなく難しい行程だという表示のところに来た(写真6)。高度感が凄い。このコースに、ドロミテ旅の最初ではなく慣れた最後に来て本当に良かったと思った。一層気を引き締める。マソディ鞍部(Bocchetta Bassa dei Massodi, 2796m)へのトラヴァースしながらの下り(写真7)とその後の登りも緊張を強いられた。

アリモンタ小屋(Rif Alimonta, 2580m)への下りは、氷河を避けるべくモルベーノ峰



写真6 岩壁を穿ってつけた道。難しいトレイルという標示がある(2018.7.24撮影)。カラビナ・スリングは安仁屋のもの。遠藤がカラビナを付け替えようとしている。



写真7 マンディ鞍部への下り（2018.7.24 撮影）。コルの反対側斜面の矢印は人を示す。

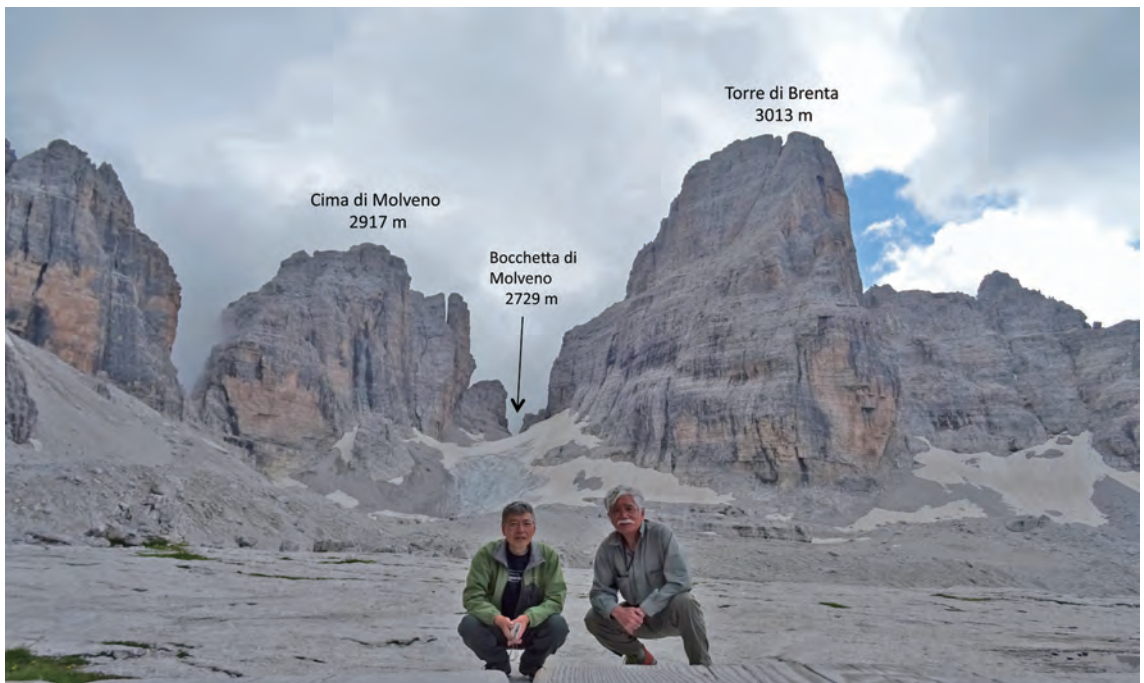


写真8 アリモンタ小屋の前で（2018.7.24 撮影）。左：遠藤、右：安仁屋。正面の氷河を避けるため、モルベノー峰の左側のコルから下ってきた。



写真9 ブレンタ・ドロミテの最高峰、トーサ峰(2018.7.25撮影)とブレнтаイ小屋。真中のルンゼの頂部がピーク。平均斜度60度の氷壁登り。また、Extreme Skierが滑り降りるとのこと！



写真10 チヴェッタの北西壁(2018.7.26撮影)。標高差約1000m。写真2枚を合成。夕日が照らす壁を見ようと、手前のティシ小屋に泊まることを考えたが、午後天気が崩れるとの予報でやめた。町に戻ったら壁はガスで見えなかった。そして晩から雨となった。

(Cima di Molveno, 2917m) を迂回する道で行った。人影はまばらである。当初、この小屋に泊まる予定だったが、天気の関係で日程を1日ずらしたら満員とのことだった。それで今夜の泊まりはもう一つ下のブレンタイ小屋 (Rif ai Brentei, 2120m) となった。アリモンタ小屋は3方を岩壁に囲まれていて迫力ある景色である (写真8)。このころガスが少し出てきて山の東側はガスで覆われた。稜線で雷雨になったら怖いなといいながら下る。ブレンタイ小屋には3時前に着いた。ここも目の前にブレンタの最高峰、トーサ峰 (Cima Tosa, 3173m) が聳える凄い景色である (写真9)。晴天で気持ちよく暑い。上半身裸で日光浴している連中が大勢いる。ここにはチャペルがあり、名前と年号が刻まれた板が沢山ある。どうやら遭難碑のようだ。

7月25日：今日は下るだけなのでゆっくり起きて、朝食を摂る。コンティネンタルであるが、昨日と違ってタンパク質系のサラミ・ハムといった肉類やチーズがない上、ヨーグルトも無い (今回の旅で唯一)。パン、ジャム、バター、ジュース、コーヒー、ミルクだけである。料金は2食付きで昨日も今日も52ユーロ (6800円ぐらい) と変わらない。この小屋の宿泊施設・食事はトゥケット小屋と比べると良くなかった。天気は素晴らしい。おもむろに、マドンナまでのバスがあるヴァレシネラ小屋 (Rif Vallesinella, 1513m) を目指して出発した。マドンナの谷を挟んだ反対側には大きな氷河を抱えたアダメロ (Monte Adamello, 3539 m)、プレサネーラ (Cima Presanella, 3558m) などの山々が見える。アダメロの近傍の氷河で1971年7月、イタリア人に連れられて夏スキーをやったことがある。氷河が激しく後退している今でも夏スキーをやっているのだろうか。

その他の地域

その他ドロミテで行った山は、アレゲ (Alleghe) からのチベッタ北西壁 (Civetta, 写真10) 見学コース、マドンナの西にあるセロドリ (Monte Serodoli, 2744 m) のハイキングである。

これらに加えてドロミテ以外で行ったのは、オルトラー (Ortler) 山城の東端にあるマーテル谷 (Martellital) のペダーコーフェル (Pederkofel, 2585m) である。オーストリアのエツ谷 (Ötztal) では、中心のセルデン (Sölden, 1390m) をベースにエツタラー・アルペン、シュトゥーバイアー・アルペン (Stubai Alpen) などでハイキングを楽しんだ。

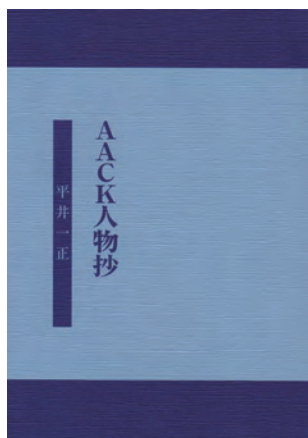
ヨーロッパのハイキングは1972年9月のスイスのベルニーナ・アルプス以来で、実に快適で楽しかった。ドロミテのバス交通も一部を除き良く整備されている。冬はスキー場となる所にはロープウェイが架かっていて、歩けばアプローチに1日かかる所を10~20分で行ける。さらに、山の上の小屋でも町とそれ程変わらない食事をほぼ同じ値段で楽しめる。登山道はしっかりと道標を含めて整備されている。家族連れ、カップルが多いのが印象的だった。

雑感として、町のタバコ臭さにはまいった。特にイタリアは酷く、町中どこを歩いてもタバコの臭いが漂っていた。飲食店内は原則禁煙だが、通りに並んだテーブルでは吸える。歩きタバコは当たり前。それをポイ捨てするから通りはタバコの吸い殻だらけ。ヨーロッパに多い石畳の道では石と石の間に吸い殻が挟まり、簡単には掃除できない。従って、吸っている人間がいなくても臭かった。

参考までに、かかった費用は、航空券が約9万円 (カタル航空、ドーハ乗換)、現地経費がヴェニス観光、ヴェローナの野外オペラ2回鑑賞などを含めて約36万円である。食事が高かった印象が強い。

ご案内 「AACK 人物抄」

平井一正



かつて AACK ニュースレターに連載した「AACK 人物抄」を 1 冊の冊子にまとめて、このたび土倉印刷から出版しました。紹介した人物は浅井東一、伊藤愿、伊藤洋平、奥貞雄、酒戸弥二郎、佐島敬愛、鈴木信、田中喜左衛門、谷博、細野重雄、宮木靖雅、宮崎武夫のほか、斎藤清明氏による高橋健治の紹介もあわせてまとめました。ご希望の方は平井までお申込みください。メールアドレスは khirai@nike.eonet.ne.jp、送料共 1000 円。A5 版 108 頁。

平井一正

原稿募集 十字峡横断

1960 年春、パイオニアワークを目指す京大山岳部は、積雪期の十字峡横断に成功しました。現在、この十字峡横断をテーマに、原田道雄会員を中心に参加者の間で原稿執筆の検討を進めておられます。Newsletter ではこの機会に、当時のことがらも含めて原稿を募集します。どうぞふるってご寄稿ください。なお、原稿執筆や関連資料についてのご相談は、原田さんあるいは横山にご連絡ください。よろしく願いたします。

会員動向

編集後記

今年は、本会のチョゴリザ初登頂から 60 年目にあたります。それを記念して、6 月から 7 月にかけてシンポジウム、写真展、企画展示が行われました。一連の行事の報告を松沢会長と榊原さんにお願し、企画展示の解説文もあわせて掲載しました。

三高山岳部ルーム日記という歴史的な資料が本会に戻ってきたことは、関係した方々の思いが結実したのもといえるでしょう。斎藤さん、榊原さんによる、これまでの経緯を含めての報告です。

安仁屋さんは今回も登山の話題を提供してくださいました。「鉄の道」も、身近の事情が許せばぜひ行ってみたいと思わせるようなお話でした。

発行が少し遅れて師走にずれ込んでしまい、申し訳ありません。皆様には本年もご協力ありがとうございました。来年も、ご投稿とご協力をどうぞよろしく願いたします。

横山宏太郎

次号原稿締め切り 2019 年 1 月 16 日

原稿送り先：横山宏太郎

発行日 2018 年 12 月 10 日
発行者 京都大学学士山岳会 会長 松沢哲郎
発行所 〒606-8501
京都市左京区吉田本町(総合研究 2 号館 4 階)
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科 竹田晋也 気付
編集人 横山宏太郎
製作 京都市北区小山西花池町 1-8
(株)土倉事務所